

花山大安講師を偲ぶ

# 故花山大安講師略年譜及び遺著目錄

## 一、年 譜

元治 元年 一歲 十二月二十日、伊勢國員辨郡久米村華戸山遍崇寺に生る。

明治 三年 七歲 十月二十八日、遍崇寺衆徒として得度す。

同 一〇年 一四歲 此の年より明治十六年まで、大賀賢海に従ひて漢學を修む。

同 一三年 一七歲 十一月十四日、餘間出仕を許可せらる。

同 一六年 二〇歲 此の年より明治十九年まで、占部觀順に従ひ宗乘を學ぶ。

同 一九年 二三歲 四月十一日、内陣出仕を許可せらる。

此の年の夏安居より明治二十五年夏安居まで、結夏聽講す。又此の年冬より明治二十二年まで、佐伯旭雅に従ひ、性相學を修む。

同 二二年 二五歲 十一月十三日、遍崇寺住職を申付らる。

同 二二年 二六歲 此の年より明治二十五年まで、山本儼識、上田照遍、楠玉諦の三師につき、一乗教を修む。

同 二六年 三〇歲 九月二日、一代素絹出仕を許可せらる。

十二月三十日、國式傳授許可せらる。

同月同日、色直綴着用を許可せらる。

同 二七年 三一歲 二月二十七日、金入輪袈裟着用を許可せらる。

同 二八年 三二歲 十月十二日、第一中學寮教授を命ぜらる。

同 二九年 三三歲 二月九日、少助教に補せらる。

八月、眞宗京都中學教授を命ぜらる。

同 三〇年 三四歲 五月、選ばれて伊勢國第一組長となる。

七月、選ばれて議制局贊衆となる。

同 三二年 三六歲 一月、視學となる。

二月、教學調査委員を命ぜらる。

六月十一日、満位に補せらる。

十一月二日、律師に補せらる。

同 三三年 三七歲 七月、選ばれて議制局贊衆となる。

九月、選ばれて伊勢國第一組長となる。

同 三四年 三八歲 四月二日、律師相當の堂班を受く。

同 三六年 四〇歲 一月十六日、金入咒字袈裟及び六藤五條袈裟着用を許可せらる。

二月五日、奥參上を許さる。

同月十六日、未滿別助音を恩許、特別衣體着用を許可せらる。

同 三十七年 四一歳

三月七日、學師の稱號を附與せらる。  
一月、寺務改正局出仕となる。

八月十三日、權僧都に補せらる。

同 三十九年 四三歳

夏安居の都講を命ぜらる。

同 四〇年 四四歳

二月二十五日、擬講の稱號を附與せらる。

七月三十日、金入五條袈裟着用を許可せらる。

同 四二年 四六歳

三月二十四日、僧都に補せらる。

同 四四年 四八歳

四月四日、靑色五條袈裟着用を許可せらる。

七月、夏安居内講を命ぜられ、『華嚴經文義綱目』を講ず。

九月、眞宗大谷大學教授を命ぜらる。

大正 四年 五二歳

四月十六日、權大僧都に補せらる。

同 五年 五三歳

四月十二日、教師對配により院家五等席を受く。

十一月二十一日、三等恩賞疊袈裟を授與せらる。

同 六年 五四歳

一月四日、院家四等席を恩許せらる。

同 七年 五五歳

七月、安居次講を命ぜられ、『華嚴遊心法界記』を講ず。

七月、依願眞宗大谷大學教授を解かる。

同 八年 五六歲 十二月二十七日、嗣講の稱號を附與せらる。

同 一二年 六〇歲 三月十六日、院家三等席を恩許せらる。

同 一三年 六一歲 二月一日、第四功章を授與せらる。

五月一日、新御門跡御慶事紀念親授輪袈裟着用を許可せらる。

七月十九日、大僧都に補せらる。

同 一四年 六二歲 十月十日、傳燈式紀念親授五條袈裟着用を許可せらる。

同 一五年 六三歲 七月二十五日、二等旌賞を授與せらる。

昭和 二年 六四歲 十二月十二日、遍崇寺住職を退職す。

同 三年 六五歲 八月十四日、再び遍崇寺住職となる。

同 四年 六六歲 八月二十一日、眞宗大學院教授を命ぜられ、昭和四年度第二期擔任として、翌年一月より三

月まで、『淨土論註』を講ず。

十二月三十一日、第三功章を授與せらる。

同 五年 六七歲 眞宗大學院規程改正、宗學院條例發布によりて宗學院指導を命ぜらる。

同 六年 六八歲 三月より五月まで、宗學院昭和六年度第三期擔任として『選擇集』を講ず。

四月十四日、常盤牡丹紋五條袈裟着用を許可せらる。

同 七年 六九歲 十二月三十日、講師の稱號を授與せらる。

同 八年 七〇歳

九月より十一月まで、宗學院昭和八年度第一期擔任として、『末燈鈔』を講ず。

同 九年 七一歳

四月十四日、新門様御得度式紀念特授五條袈裟着用を許可せらる。

六月九日、准上座四等を恩許せらる。

安居本講を命ぜられ、『末燈鈔』を講ず。

同 一〇年 七二歳

二月五日、遍崇寺住職を退職す。

四月四日、權僧正に補せらる。

九月より十一月まで、宗學院昭和十年度第一期擔任として、『愚禿鈔』を講ず。

同 一一年 七三歳

五月七日、准上座三等を恩許せらる。

同月八日、自坊遍崇寺に於て示寂す。

同日、御染筆院號法名『佛聲院大安』並に似影を下附せらる。

同月十四日、午後一時自坊にて本葬執行、本山よりは特に香資料を授與せらる。

## 二、著 書

明治二四、一一刊

眞宗 提 要 一卷

大正 四 刊

執持鈔講義一卷(眞宗通信講義ノ内)

同 七 刊

華嚴遊心法界記講錄一卷(安居)

昭和 三、 六刊

眞宗要義論草 一卷

花山大安講師を偲ぶ

大谷學報 第十七卷 第二號

一七〇

同 四、刊

華嚴普賢行願品講義一卷(安居)

同 九、七刊

末燈鈔欽仰記一卷(安居)

## 三、諸雜誌掲載論文目錄

明治四一 五

貫練叢誌五編五集

學の眞意義

同 四三 二

同 七、二

御一代聞書の法語に就て

同 四四

佛教講演集

眞宗の教義と華嚴經

大正 元 一二

法藏 二五五號

大經三毒五惡段講話(一五回に及ぶ)

大正 二

無盡燈 一八卷十一

他力の種々義

同 八

貫練 一〇、八

憶念彌陀佛本願

同 四

同 二〇卷四

我祖御援引の華嚴經文

同 一〇 一一

教化 八、九號

眞宗の眞價值

同 一一 五

法藏 三六八、九號

善巧攝化の願海

同 一一 七

同 一六、七號

漢文學上より見たる御本書

同 一二 八

歡喜 五號

聽聞に就て

同 一三 五

教化 一九號

信の絶對性

昭和 二 一

法藏 四二五號

同信同行の喜悅

同	四	一一	中外日報 八六五四、五	金子君の淨土觀を讀みて
同	五	一一	宗學研究 一號	一念多念論
同		一一	眞宗 三四九號	御消息私解
同	六	六	歡喜 九九、一〇二、一〇五	不廻向の行
同	七	六	同 一一一號	廢立の正意
同		八	法藏 四八八號	不廻向の行
同		一二	歡喜 一一七號	後生の一大事
同	八	一	法藏 四九五號	果遂の願意に就て
同		二	同 四九六號	後生の意義
同		三	歡喜 一二〇號	今信順二尊之意
同		六	法藏 五〇〇號	御文と稱名報恩
同	七	四	宗學研究 四號	廻向の辯
同	八	一一	同 七號	論註當分の念佛
同		同	眞宗 三八五號	涅槃常樂の彼岸
同		一二	歡喜 一二九號	爲衆開法藏の御文に就て
同	九	一	法藏 五〇七號	次第相承の傳統に就て

花山大安講師を偲ぶ



## 花山講師の追憶

本田主馬

花山大安講師は今十一年五月八日、七十三歳を一期として入寂せられた。師は三重縣員辨郡久米村中上遍崇寺大權師の長男にて、母は一昨年迄存命せられ、九十一歳にて亡くなられた。母親の九十歳の時、大安師は丁度七十歳にて、母子合せて百六十になると云ふので、當法主殿に百六十壽の御染筆を願はれたと云ふ、有名な話が残つてある。斯様な達者な親の子であるから、少くとも八十歳位は生き延びらるであらふと思ふて居たのに、案外に早く入寂されしことは、實に遺憾の至りである。殊に、此人は他人の追蹤を許さざる特別の技能を有つて居られた故に、師の示寂は一派の爲、又我學界の爲に痛惜の至りに堪えぬ次第である。

私の知る範圍に於て、師の略歴を陳れば、師は學校教育を受けた人ではない。子供の時の寺子屋を上りて後、青年時代即中學時代は、隣村の大鐘の半學舎なる大賀旭川の門に入りて漢學を修められた。旭川と云ふ人は九州の廣瀬淡窓の十八歳子の一人で、堂々たる漢學の大家で

ある。當時旭川の塾は名高いもので、三重縣人は勿論、他府縣より續々入學者があつた様子で、前田慧雲博士も此處の出身であり、前總長阿部御大も此塾に學ばれた様に聞いて居ます。大安師の漢學の力及び詩文の素養は、皆此塾にて陶冶成熟せられたものであります。師は此塾の塾頭であつた様に聞いて居ます。それが師の十七八歳の時分の事であつたそうです。師は實に驚くべき秀才であつたと申すことであります。其後三河の占部觀順師の破塵館に入門して、宗乘を勉強せられた。此處で宗學の蘊奥を究めたる後、二十幾歳の時より京都に上り、泉涌寺の旭雅師に就きて性相を學び、或は楠玉諦師に華嚴を、野山では眞言を學ばれた様であります。何分にも漢學の力が充分にあるから、漢譯の經論が樂に讀みこなせる故、何を學ぶにも能率が上り、より以上に効果を收められたようです。

成業の後には育英に従事せられ、現今の府立第一中學校の前身たる兼學部(中學校)に、又は眞宗大谷大學に教授

ある。

として精勤せられ、安居の講義も數回勤められ、又内記龍舟寂滅の後は、内事務局尙書として永年の間、御書又は頌徳文等の案文に天分の才能を發揮せられて、今日に及んで居る。かの香山院師の、明治維新の排佛毀釋の大法難時の講師であつたが、常に他人に向つて、我は坊主を止められたとて、飯喰ふ種は三つや四つは持つて居ると申されたと申すことであるが、大安師も多能な人で、佛教學は申すに及ばず、漢學でも、詩文でも、書道でも優に一家を成して居られた、實に當今稀なる多能な才人でありました。加之、事務の才能も多分に具へて居られた。師は決して偏固なる學究一轍の人では無かつた。殊に儒で腹をこしらへて居られたから、道を守ること頗る嚴、如何なる大家でも破倫の行爲ある人は、徹底的に排撃されたものです。居常、人に語りて云く、庶くは自分の一生の内に、一人でよいから眞の念佛者を養成したい。

之が自分の願である。以て如何に門法の教導に熱心であつたかゞ分ります。晩年、縣下の眞大卒業生の爲に宗乘を講授して、若き學徒を教養せられた。噫、花山師は實に掛替のない、唯一無二の眞宗の寶であつた。無情の風は容赦なく此宗寶を吹き散らして他方に奪ひ去つた。今や則ち無し、實に寂寥の感に堪へぬ。眞に痛歎の至で

花山師は元治元年十二月生れで、年弱の七十三歳である。之に就き、不老仙齋藤講師云く、僕と花山君とは同年と云ふことぢやが、同年ならわしが若い。何故かなら、わしは十二月生れぢやと。例の不老仙主義を、どこ迄も強調された。然るに戸籍面を見れば、花山師は十二月二十日生れである。齋藤氏果して若きや否や、後日面接して輪贏の程を伺ひたきものなり。

今年は講師の厄年にや、二月には上杉博士が入寂せられ、今又霞外講師花山氏を失ふ。上杉師は今太閤と云はれる程、幸運に恵まれた人で、才學兼備の上に、子仕合せが善く、總領の慧岳師を始め、文鏡文能と二人の秀才を持つ子福者である。之に反して、霞外先生は子仕合せは甚悪く、實子が有つたことは有つたが夭折して育たず、妹の子を養子として眞大を卒業させたら、研究科在學中に死亡した。今現に相續しつゝあるのは弟の子供である。

最後に申添て置きたい事は、私が師の博覽に驚きし一事である。報恩講私記の終に、六種廻向の語あり、古來此は分らぬと申し來りし處である。或者は以上の六歸禮の文を以て、之が六種廻向であると速斷したことも聞いたことがあつた。されど歸禮は歸禮にて廻向ではない。

私は嘗て或る講師に此六種廻向の事を尋ねしに、分らぬとの返事があつた。其後不圖したことから夫が分つた。ある日、花山師に逢た時、試に六種廻向とは何々かと問ふた。先生即座に答へ、云く六種と廻向とは別ぢやと。意外／＼先生の答は實に満點であつた。こんなことは、餘宗の人は能く承知し居る事なれども、眞宗では一向に使はぬ事に知らぬのである。何も六ヶ敷いことでも何で

## 佛聲院大安講師を追懷して

松 原 恭 讓

抑、今年は如何なる年なるか、我大谷派に於ける七講師中、去二月十日には加賀の冷華院上杉講師を喪ひ、又本月八日には伊勢の佛聲院花山講師を喪ふ。誰か教界の爲に之を惜まざらんや。殊に余が如き多年兩師の親愛を蒙むるものをや、一層追悼の情に堪へないのである。

就中、余の花山師を欽仰するや久し。師の嚴父大權師は、名高き廣瀬淡窓門下の碩學なる、同國の旭川大賀賢勵先生の高弟であり、慈母は前田氏、同國の止舟前田慧雲博士の叔母である。よりにて師も亦、夙に旭川先生の塾に入

花山大安講師を偲ぶ

もない。若し知らんと望む人あらば、織田得能氏の佛教大辭典を見ればすぐに分ります。

序に一言付加しておきます。花山師は世間から「石橋を叩いて渡る人」と云はれたもので、本統に要心深い人でありました。落付の内にしつかりした處があつて、唯おとなしいと云ふ好々爺ではなく、仲々の論客でありまして、容易に己が所信を曲けぬ人でありました。以上

つて漢籍を學習せられしが、若うして嶄然頭角を顯はし、其塾の上首となられしといふ。師の詩文に長ぜられしは淵源全く茲にあるであらう。また同國に於ける、横山晋學師は師の賢弟にして、眞宗大學第七期の卒業生なれば、正則を踏まれたと云ふべきが、師は常に變則によりて實學にいそまれたものである。そは人も知る如く、師は泉山の佐伯旭雅上人に就て性相學を研究し、又南都の山本儼識僧正が京都永觀堂に於て華嚴五教章を講ずるや、終始其席に列し、又上田照遍律師が東大寺戒壇院に於て

探玄記第一卷等を講ずるや、奈良に留學すること半箇年許、又高野山に暫く遊學せられしが、楠玉諦師は已に管長を辭して嵯峨の大覺寺に隱栖せられしに由り、嵯峨に往きて妄盡還源觀等を聽講せられたのである。又宗乘は兩三箇年、三州占部觀順師の破塵館に在て研究せられしのみならず、廣く先輩諸師の著述を涉獵せられたるを以て、たゞ一師の説を墨守せずして善く取捨を加へられて居る。

是を以て明治二十七年比より(？)我本山に於て、學師補の試験を舉行するや、果然、最初第一回の試験に及第せし者は、師及び嵯峨に於ける同學の越中國大中臣信教氏の二人のみであつた。是れこの試験は實に難關にして、宗乘及び餘乘の大部を、筆答と口答との兩方面に掛けて其學力を試みられたものである。而してこの學師補といふが眞宗大學本科卒業同等にて、其上の學師は研究科卒業の者に授與せられたのである。

是の如く、師は學才あり人望ありて、議制局の賛衆にも選ばれ、中學の教員ともなれしことがある。處が明治三十七年夏、眞宗大學卒業生は直に學師となるやうになり、それに准じて學師補の者は總て同年中に學師へ進めたのである。又明治四十年には三講者の學職も學階とな

りて、研究科卒業者及び同等の學力ありと認定せらるゝものは、教學部の推薦にて擬講を授けらるゝこととなる。世に之を丁未擬講といふ。師も亦其選に與かつたのである。又師は明治四十四年夏安居の内講として、華嚴文義綱目を講ぜられたるが、同年九月には東京巢鴨の眞宗大學を京都高倉へ移されたので、其際、師は眞宗大谷大學教授を拜命されたのである。又大正七年夏安居の次講として遊心法界記を講ぜられ、又其後嗣講に進み、昭和四年夏安居の次講として、普賢行願品を講ぜられ、又昭和八年、師は七十歳を以て講師の稱號を授與せられたるが、昭和九年夏安居の本講として末燈鈔を講説されたのである。尙師は故内記龍舟師の後を繼ぎて、本山内事局用掛を拜命し、或は貞觀政要等を法主臺下へ進講せられ又宗學院に於て論註、末燈鈔、愚禿鈔等を講ぜられて居る。

さて回顧するに、余が親しく師に對面せしは、高倉大學寮奉職の時なりと思ふ。即ち明治三十九年夏安居の際にて、吉谷覺壽講師は論註を、蓮弘鑑嗣講は散善義を講説せられたるが、花山師は散善義の都講として、論註の都講佐藤了秀師等と共に出席せられしを以て、同氣相求むるやうになつたのである。

爾來益々親誼を辱ふし、屢々漢詩の拙作に對して高評を蒙りたることあり、又書籍を相互融通して覽ることを得たのである。師は曾て一蓮院秀存師の探玄記書入を寫すに就き、同國如藤法城師と相謀りて、師自ら初め十卷を寫し、後十卷は法城師他筆を雇ひて寫し置きしが、法城師物故の後、其本を名古屋其中堂に賣却せしと聞くや、急速之を求めたと申されしが、余は其秘藏書をも拜見したことである。又大正十四年の夏、師は鬼頭覺道師と共に余を戒壇院に尋ねられし事あり。乃ち三人同道して、東大寺管長筒井寬聖上人を訪問せしが、上人と師とは曾て、永觀堂聽講の時に於ける同學のことゝて、上人は其昔、花山師の揮毫せし軸物を取り出して示さる。師も感懷斜ならずして其舊作の詩を見寫せられたのである。それより其席を辭し去て公園を散歩し、同じく三笠山の月を賞したのであつた。其後昭和八年の夏安居前にも戒壇院に來泊せられるが、常の御話に我學友中には管長となりしもの三人あり、曰く東大寺の筒井寬聖師、曰く法隆寺の佐伯定胤師、曰く大念佛寺の山上戒全師なりと。

然るに花山師には久しく子なきを以て、親戚より昌夫君を貰はれたるが、大正二年の頃、偶々一男兒を擧げられしも、惜哉大正五年その愛兒を喪はれ、又昭和三年に

花山大安講師を偲ぶ

は已に大谷大學研究科に入りし昌夫學士をも喪はれた。よりて更に親戚の横山氏より同大學卒業生行健學士を貰ひ得て相續人と定められたのである。尙師の嚴父は六十歳の秋、師が夏安居滿講後、殆んど二箇月を経て、九十一歳の高齡を以て往生せられたのであつた。又花山師は別號を霞外と稱し、或は佛聲と號し、或は皎々子と號し、其居名を黛橫堂といひ或は遠風樓といひ、或は懷新軒といひ、或は挹翠閣濕處といひ、或は大有園といひ、或は遍崇精舍といはれしが、今や遂にその自坊遍崇寺に於て物故せられ、法名佛聲院釋大安と號せらるることになつた、實に惜しむにも猶餘りあることである。

又思ふに、去大正十三年、師が華甲自述の二律に、  
聚如泡沫散如煙。形骨偷存六十年。妙諦悟來真俗際。  
上乘參得肉妻前。芳梅出竹鶯呼友。暖日滿池魚露肩。  
取次春風庭砌起。胸中一派自相牽。

淨几明窓一炷香。寫經念佛樂無量。百千檀越喜施物。  
八十阿摩笑倚堂。俛仰皆恩醞似酒。行藏惟義澗如霜。  
心安身健值周甲。懶與梅花競厥芳。

とあり。以て其平生の心境を窺ふべし。之に對して諸家の和韻も少からずと聞きしが、余も亦驥尾に附し、敢て

次韻といふにはあらねど、その兩韻の字を節取して、左の拙偈を呈せしことである。

溫雅好迎華字年。 遊心樂利福無量。

不惟絢爛文辭美。 況復圓通學德芳。

## 佛聲院釋大安先生を憶ふ

可 西 大 秀

去る三月學年末、休暇を利用して歸郷、暫時滞在、四月初め上洛直後、今年度學部開講々義題目表を手にして、花山先生が、今年度學部に於いて、愚禿鈔と華嚴五教章とを講ぜらることを知つた。今から兩三年前の昭和七年度であつたかと覺えて居るが、淨土論々註を講ぜられたことがあつたので、時折に先生のお姿を學校でお見受けしたこともあつた。それもその年度限りで故郷に歸臥されたので、學校では其後お姿が見られなかつたが、今年から再び聲咳に接する機會が多くなり、眞宗學及び佛教學の講座に、異彩を附加されることゝなつたので、心密かに喜んで居たことであつた。

處が、授業始まつても、一向お顔が見えないので、不思議に思ふて居つた。その内に、花山先生の愚禿鈔と五

上來、恐くは疎漏の失あらんも、突然思ひ浮ぶに任せて之を略記し、以て聊か茲に追懷の意を表せし次第である。(昭和一五、五、二三、稿)

教章とが休講の揭示が學部揭示場に張出された。その理由は御病氣とのことであつた。御老體のことであるから細心の注意からの御養生とばかり、自分勝手に思ひ込んで、始めの間は、あまり心にも懸けなかつたが、期間があまり長いので、如何せられたことかと、心密かに案じて居つたのである。處が、五月八日の新聞に重態のことが傳へられた。その時は新聞を疑ふたが、九日には、八日午前三時三十分命終還歸西との訃報があつたので、逝去の眞實であつたことを知つたのである。僅か兩三ヶ月前の二月、前學長上杉文秀先生逝去の際には、

博士講師名不虛 叢林百代永終譽

天台受法道風篤 大谷督譽宗學舒

庭上芝蘭希世臭 生涯心血幾篇書

塵緣忽盡西歸急 恰是芳梅吐玉初

と賦し、送つて哀悼の意を表して居られたことを思ひ合せて、言語で詮すことの出来ない、感觸を心に受けたことである。

傳へ聞く處に依れば、先生は、元治元年十二月二十日三重縣員辨郡桑村花山家に生れ、七歳遍崇寺に得度し、その法燈を紹がれたのは、十七年後の二十三歳の時であつたが、それ以後、七十餘歳の一兩年前までは、住職として寺門の經營に努められたことである。その間宗政にも關與すべき地位に置かれ、三十年七月と三十三年七月との兩回に贊衆、即ち現今の宗議會議員に、三十二年には教學調査會委員に、三十七年には寺務改正局出仕に任ぜられたこともあつた。然し、斯様な動きは、先生の境遇や周圍の事情から、止むを得ず爲されたことであつて自發的に、此方面のことに携はるやうに努められたものではなかつた。従つて、斯うした方面の、先生の動きの中には、先生の眞實の姿は露はれて居らないと思ふ。學究者としての先生こそは、私共の眼に映じた先生の姿であつて、特に漢學に長じ詩文には堪能であつた。それは大正十一年九月、内事局用掛に任ぜられ、尙書としてその重責に當り、現在まで十數年に亙り、そのことに携は

花山大安講師を偲ぶ

つて居られたことでも知られるのである。その基礎は、明治十一年から約六ヶ年間、當時伊勢の地で私塾を開き、門弟の扶育に努めて居つた、大賀賢勵氏に師事せられて築かれたものである。而して、尙ほ眞宗學、佛教學にも造詣の深いものゝあつたことは、周知のことである。その眞宗學研鑽の最初の指導者は、占部觀順師であつた。明治十六年、先生は大賀氏の下を辭して、愛知縣幡豆郡西尾町に在つた、占部師の私塾に赴き、同十九年まで其處に滞在して、薰陶を受け、その學風を傳へられたことであるが眞宗學の基礎的論究は、此間に於いて終つたことと思ふ。そこで此歳の夏、箒を負ふて上洛、安居に懸席して更に學識を深められたことである。此頃から佛教學の研鑽に心を傾けられるようになり、明治十九年の冬の頃から京都泉涌寺の學僧、佐伯旭雅師に従ひ、性相の學を受けその指導の下に同二十二年まで研鑽を繼續せられたことである。後、更に轉じて一乘家の思想に通達せんと志し山本儼識、上田照遍、楠玉諦等に従ひ、その指導によつて華嚴教學の研鑽に努められたことであるが、それは、明治二十二から、同二十五までのことである。されば先生の學究は、現今の學校制度の如き組織的なものによつて爲されたものではないが、その徑路を觀るに

整然と順序を逐ふて進んで居られ、その研究の領野も廣く、漢學及び佛教々學に互つて居るのを見るのである。斯様にして培養せられた、廣くして且つ深い學識を以て、先生は眞宗大谷派の學界に臨んで居られたのであるが、明治二十八年から三十年までは、眞宗京都中學寮にて教授として教鞭を執り、同四十四年九月から約二ケ年間、眞宗大谷大學にて華嚴の教學を講じ、大正八年十二月嗣講の稱號を受け、昭和五年一月宗學院の指導を命ぜられて、眞宗學を講ぜられ、昭和七年には講師の學階を授けられ、その學徳は一派の内外に重きをなしたものである。思ひ廻らして觀るに、先生は、至極溫厚で君子然たる處があり、その態度には剛直なる處がなく實に慈愛に満ちた、軟かな態度で人に接せられたので、親しみ深い人であつた。而して、如何なることにも常に謙讓の態度であつた。殊に學については、撞いて始めて妙音を發する洪鐘の如く、その廣く深い蘊蓄は、叩くを待つて、打ち出されると云ふ具合であつた。故に、殘されたものは、世の範とすべきものであつた。詩文に於いて然りであつたらうが、宗學に關するものでは、彼の「末燈鈔欽仰記」の如きは、その一である。

先生の學徒としての行跡について尙ほ記るべきこと

は多いが、その一端を記して追憶の言に代へた次第である。



師 秀 文 杉 上 故



師 安 大 山 花 故